

次の文章は、亀田達也『モラルの起源』の一節に手を加えたものである。これを読んで後の問に答えなさい。

「どのようにしたら平和な暮らしを実現できるのか」に関する問いは、ギリシヤや中国の古典から今日の法・政治哲学に至るまで、人文社会科学のもっとも中心的な問いの一つです。人文社会科学の知恵は、「平和な暮らしを支えるものは、王権、法の支配といった何らかの統治の仕組みや、社会的な規範・道徳である」と論じてきました。一七世紀の政治哲学者ホッブズが『リヴァイアサン』の中で展開した議論はその典型です。

三〇年戦争などの悲惨な戦争を長い間、何回も繰り返してきたヨーロッパ中世の歴史を承けて、ホッブズは、人間集団の自然な状態を「闘争状態」だと考えました。自然界に存在する資源が有限である以上、自己保存のために各人が勝手に振る舞うことにより、秩序のない競争が生まれてしまう（自然権の自由な行使による万人の万人に対する闘争状態）。そうした無秩序な混乱や戦争状態を避け、平和で安定した社会を実現するためには、「強力な中央集権の仕組み」が必要になる、とホッブズは考えたのです。

ホッブズは、人間の自然状態を動物的なものとして捉えました。それは「弱肉強食」、「血と爪」

といった血生臭い凄惨なイメージでした。実際、ホッブズに限らず、私たちは動物たちの世界を、平和な暮らしや協力関係とは程遠いものとして考えてきたのではないのでしょうか。しかしそのような「動物的な自然状態」のイメージは、実際の動物たちにどれだけ当てはまるのでしょうか。

南米大陸に、家畜の血を吸って生きるチスイコウモリという小動物が生息しています。チスイコウモリは、昼間は洞窟などで眠り夜になると活動する夜行性の生き物ですが、社会性がよく発達しており、一〇〇個体くらいの群れ（血縁関係のない複数のメスたちを中心とする群れ）を作って生活します。興味深いことに、チスイコウモリの主にメスたちの間で、不運にも獲物にありつけなかった仲間のために、血を吐き戻して分け与える分配行動が一九八〇年代に発見されています。チスイコウモリは代謝が早く、二日続けて血が吸えないと餓死してしまうことが知られています。吸った血を不運な仲間のために分け与える行動パターンは、人間社会における社会保険や互助組合のような役割を果たすこととなります。

動物行動学者のカーターらは、このような分配行動の仕組みを厳密に検討するために、二年間にわたる丹念な実験的検討を行いました。彼らは、

まずすべてのコウモリ個体のDNAを調べること
で個体間での血縁関係について確認しました。そ
のうえで、チスイコウモリをランダムに一個体ず
つ絶食させ、巣に戻したあとに他の個体たちから
どの程度の血を分けてもらえるかを調べています。

実験の結果、絶食個体が相手からどの程度の血
を分けてもらえるかをもっともよく説明するのは、
その相手に対して以前にどのくらいの血を分け与
えたかという回数でした。相手の性別や、以前に
毛づくろいをした程度、血縁度といったほかの要
因は、これと比べ説明率の点で劣っています。

つまり、以前ほかの個体に血を与えたことのある
個体は、血を与えたことのない利己的な個体に
比べて、獲物にありつけなかったときに多くの血
を分けてもらえます。さらに、コウモリたちの一
部は、以前自分に血を分けてくれなかった相手に
対して血の分配を積極的に拒む行動さえ見せたの
です。「恩には恩を返す」、^{あだ}「仇には仇で報いる
」といった、いかにも人間的な「信義に厚い」行
動が、チスイコウモリの社会で観察されたわけ
です。

チスイコウモリの社会に、ホツブズが考えたよ
うな強い中央集権の仕組みはもちろん存在してい
ません。このような行動パターンは、強いリーダー

ーや王権によって上からコントロールされるものではなく、対等な個体同士が相互作用するなかから自然に生まれた「平和状態」（人文社会科学の言葉を使うなら「自生的秩序」）です。

トリヴァースは、動物たちの社会で、非血縁の相手との協力を生み出す仕組みとして、互恵的利他主義が重要だと主張します。しかし、互恵的利他主義が成立するためには、特定の相手を見分けられる（個体の認識）、相手の取った行動を覚えていられる（記憶）、相手に対して協力するかどうかを自分だけで決められる（行動の自由選択）など、個体がいくつもの能力を備えている必要があります。このような認知的・行動的能力がどれも相当に高い能力であることを考えると、互恵的利他主義が、ヒトや霊長類以外の動物たちの社会で実際にどこまで広く見られるのかについては、さらなる検討が必要でしょう。

しかし、人間の社会で互恵的利他主義が普遍的に見られ、平和な暮らしを築く重要な基盤となっていることは間違いありません。たとえば、政治学者のアクセルロッドは、第一次世界大戦の時に、最前線の塹壕さかひで向かい合うドイツ軍部隊とフランス軍部隊の間に「殺しも殺されもしない」やり方がよく見られたことを指摘しています。両軍とも

積極的に相手を狙って撃とうとはしない協力関係が自発的に生まれ、その結果、向かい合う部隊の間で暗黙の休戦状態が実現したと言います。

しかし、このようなローカルな平和（自生的秩序）を壊したのは、中央司令部による突撃命令と実行への監視でした。相手の協力が安定的・長期的に見込まれる限り自分も協力する互恵的利他主義にとって、直接のプレイヤーではない（現場にいない）中央司令部の上からの介入は、まさに想定外の妨害要因だったわけです。

（引用先 聖心女子大入試問題）

問 次の各文の中で、本文の趣旨に合わないものを二つ選びなさい。

- ① 動物的な自然状態のイメージは、実際の動物たちの社会には当てはまらず、人間らしい信義に厚い行動があらゆる動物の社会の基本である。
- ② カーターの実験で、以前仲間に血を分け与えたことがない個体ほど自分が絶食した時に仲間から血を分けてもらえないことが明らかになった。
- ③ 戦争の最前線において殺しも殺されもしないことがあったというのは、将来の見返りが期待できない究極の状況で生じた利他の具体例である。
- ④ ホッブズは、平和な暮らしを実現するためには各人が勝手な振る舞いをやめ、強力な中央集権の仕組みを受け入れることが重要であると考えた。
- ⑤ チスイコウモリの社会では、強い中央集権のような仕組みがなくても、対等な個体同士が相互作用することによって平和状態を作ることができる。